

報告番号 甲 乙 第 号

## 鈴木 康則君 博士学位請求論文 審査報告書

論文題目：条件への思考——ジャック・デリダ「暴力と形而上学」の読解

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授

同大学大学院文学研究科委員 斎藤慶典

副査 明治大学文学部教授 合田正人

副査 新潟大学人文学部准教授 宮崎裕助

学識確認 斎藤慶典

鈴木康則君の博士学位請求論文は、1960年代以降のフランスで活躍した哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の『エクリチュールと差異』(1967年) に収録された論考「暴力と形而上学」に集中的に取り組む。具体的には、同論考において展開された諸思考の内、その中核となる発想の一つである「超越論的なもの」の位相に着目し、とりわけ「暴力」や「尊重」という語に込められた意義を一箇の問題提起として捉え、E. レヴィナスやP. リクール、M. ブランショから同時代の思想との関連も踏まえつつ、その哲学的意図を描き出そうとする野心的な試みである。デリダだけでなくレヴィナスの思想に関しても「暴力と形而上学」の重要性は繰り返し指摘されてきたが、本論文はそれらの先行研究に配慮しつつ、デリダの哲学が「他者」をめぐる一連の問題に対して一定の寄与をもたらしたと主張する。この主張を支えるべく、デリダが「暴力と形而上学」において論じた「暴力」および「顔」の問題系を「超越論的」次元での問題として、すなわち「他者」問題に関わる哲学的言説が可能となるための条件を探る思考として整理する解釈は、多層的な角度からのアプローチを可能にした点において、デリダやレヴィナスの哲学的思考にとどまらず「他我問題」や「共同体」に関する哲学研究一般に新たな論点を提供しており、高い学術的価値を有する。

### 論文の構成

本論文は、序章と5つの章、終章から構成されている。その全体の課題は、「暴力と形而上学」で主題化された「他者」および「暴力」の問題系に対し、デリダがそれらの「条件」の探求として遂行した「超越論的」哲学の企図を精査することである。本論文は、大きく前半部(1~3章)と後半部(4章以降)に分かれる。前半部では、上述の課題に取り組むための準備作業として、(1)「他者」に関わる「尊重」概念の解明、(2)デリダの「厳命」概念の形成に関し、ブランショの「このうえなく深い問い」という問題系が果たした役割の検討、(3)デリダの「暴力」

概念の内実の解明として、E. ヴェイユの「暴力」概念との比較、を行なう。後半部はデリダとレヴィナスによる「他者」についての思考が集中的に分析され、上述の課題を両者のテキストの横断的な読解によって立証する。本論文の具体的な構成は以下のとおりである。

#### 序章 本論文の意図と構成

#### 第1章 カント的「尊敬」からデリダ的「尊重」へ

##### 序 問題の所在

- 1 リクールの「カントとフッサール」論文
- 2 「実践的契機」としての「尊敬」
- 3 レヴィナスとカント的「尊敬」
- 4 デリダにおける「尊重」概念の位置づけ
- 5 結語 ——「超越論的現象学」の承認と批判——

#### 第2章 「命令」と「厳命」の存在論

- 1 「問い」の「自由」と「規律」
- 2 ブランショの論考「このうえなく深い問い」
- 3 哲学の可能性とその課題
- 4 結論 ——条件としての「厳命」——

#### 第3章 エリック・ヴェイユの「暴力」論

##### 序 問題の所在

- 1 ヴェイユにおける「論理学」と「対話」
- 2 「対話」の目的と「一貫性」
- 3 「対話」の「諸限界」としての「暴力」
- 4 ヴェイユにおける「パラドクスの」思考
- 5 結語 ——ヴェイユにおける「暴力」と超越論的次元

#### 第4章 デリダのレヴィナス批判における「無限」と「他我」の問題

##### 序 問題の所在

- 1 「他我」と「絶対的に他なるもの」
- 2 「無限の観念」と「無限定」
- 3 「無限判断」と「顔」
- 4 「根源的非-現前」と「無限」の問題 ——「システム」と「知」

#### 第5章 「超越論的」次元と「暴力」

##### 序 問題の所在

- 1 「超越論的述語」あるいは「超カテゴリー的述語」
- 2 レヴィナス的「顔」と「志向性」
- 3 「顔」と「まなざし」の現出
- 4 レヴィナス的「平和」とデリダ的「暴力」

5 結論 —— 「超越論的」水準での「暴力」および〈平和〉批判の行方  
終章 結論と展望 —— 「応答」から「政治」へ

### 論文概要

序章は、デリダによる「暴力」や「他者」についての議論が「超越論的なもの」としての意義を有するという本論文の仮説が、先行研究に対して持ちうる位置づけを提示する。デリダの「暴力」論をめぐるのは比較的早い時期から様々な研究者たちが検討を積み重ねてきたが、それらにおいてはデリダおよびレヴィナス両者を視野に入れつつ説得的に議論が提示されているわけでは必ずしもない。一方で『ラディカル無神論』のM. ヘグルンドのようにデリダの「暴力」論を擁護する立場が存在し、他方で『甦るレヴィナス』の小手川正二郎のようにデリダの「暴力」理解に反論する立場が存在する。しかし、ヘグルンドや小手川においては、デリダの議論が持つ「超越論的」次元での意義が論じられていないため、その「暴力」論を適切に扱うことができない。これに対して本論文は、「暴力」論の検討にあたって「無限判断」（主語と述語の間に「共通基盤」が無いとされる判断）および斎藤慶典が論ずる「超越論的」な意味での〈平和〉（「根源平和」）を批判的に検討することによって、デリダとレヴィナスによる「他者」の問題系に対して新たな観点を導入する。

第1章はデリダの論ずる「尊重」(respect)の内実を検討し、彼のリクール解釈に込められていた哲学的意図の把握を試みる。カント的「尊敬」(respect)は「法則」に向けられるが、リクールはそれを「人」に対して用いようと試みる。これに対してデリダの言う「尊重」は、「法」や「他人」に対して用いられるのではなく「倫理」に先立つ次元に向けられ、「尊重」としての「超越論的現象学」が「倫理」の基礎とされる。本章は「尊重」と「尊敬」を区別することによって、デリダの思考における「超越論的なもの」の位置づけを明確化する。

第2章は、「暴力と形而上学」で扱われた「厳命」の位置づけを検討する。デリダが同論考において「命令」(commandement)と「厳命」(injonction)を厳密に使い分けるとは言い難いが、文脈に応じて使い分けようとしている点に本章は注目する。「命令」は内世界的・経験的な次元でやり取りされるものであるのに対し、「厳命」はそもそも誰かが発したり、具体的なかたちで現われたりするものではない。ブランショはそれに対する解決がありえないような「問い」を「このうえなく深い問い」と呼び、その「問い」への「応答」を不可避なものと考えたが、デリダはブランショのこうした〈それへの「応答」が不可避の「問い」〉を「厳命」という語を用いることで引き継いでいる。この引継ぎを通してデリダの議論が「他者」問題へと接合するさまを、本章は明らかにする。

第3章は、デリダとレヴィナスの間で交わされることになる「暴力」をめぐる応酬の内実を検討する一つの準備として、ヴェイユの「暴力」論を取り上げる。ヴェイユにとって哲学は「対話」を通して「真」なるものにおける一致を追求する「学」であり、対話の中でのこの一致を阻むものが「暴力」とされるがゆえに、哲学はそれと戦うことによってのみ哲学たりうる。この意味で、「暴力」は哲学と不可分のものとなる。デリダは、こうしたヴェイユの「暴力」論がレヴィナス

のそれと対蹠的な位置にあると論ずる。これに対して本章が明らかにするのは、ヴェイユとレヴィナスのこうした対比が際立つのは「暴力」をめぐるのではなく、哲学的「言説」が「対話」を通して「他者」との一致を目指す営みなのか、それとも「他者」とのまったく別の関係の樹立に向かうものなのかをめぐってだという点である。それによって本章は、「暴力」をめぐるヴェイユとレヴィナス、さらにはデリダの関係を新たな布置の下で考察する余地を開く。

第4章はデリダによるレヴィナス批判の内実を検討するために、「他者」が両者によってどのように論じられていたかを検証する。その際手掛かりとするのは、「他我問題」および「無限」という論点である。デリダもレヴィナスも「無限」という論点を導入する必要性を主張するが、当の「無限」の扱い方において両者の立場の違いがより鮮明になる。本章はレヴィナスの同僚だったJ. ゴルディーンが主題化していた「無限判断」をめぐる議論を参照軸とすることに加え、V. ジャンケレヴィッチおよびブランショによる「無限」への言及にも着目しつつ、デリダとレヴィナスの「無限」論が及ぶ射程ならびにその問題点を批判的に考察する。

第5章はデリダにおける「超越論的なもの」の位置づけを辿った後、「顔」と「暴力」の問題系の解明に集中する。レヴィナスが倫理の中核に見て取った「顔」(visage)とは、それを前にしては「応答」が不可避となる事態である。それを本章は、J.-P. サルトル、M. セール、斎藤らの議論を参照しつつあらためて検討し、それが私にいかにして到来するのかを明らかにする。そこで問題となるのが、「顔」と「平和」および「暴力」の関係である。「顔」は「平和」裡に到来すると論ずるレヴィナスと、それはつねにすでに「暴力」に晒されていると反論するデリダの両者を、いかにして共に適切な理解にもたらしうるかが本章の課題となる。

終章は亀井大輔やC. シャリエが言及する「終末論」を手掛かりとしつつ、宮崎裕助の論ずる「コミュニケーション」の議論が「暴力」論をそれ以外の問題領域へと接続する可能性を検討する。この検討を通して本章は、これまで本論文が考察してきた「他者」ないし「他人」と「私」との「応答」を介した一対一の「倫理的」・「暴力的」関係が「政治」あるいは「共同体」という一対他、他對他の問題系への橋渡しとなりうる道筋を、デリダが言及する「夢」や「経験論」を引き合いに出しつつ展望する。

## 審査概要

本論文は、初期デリダの論考「暴力と形而上学」という難解な論考を讀解するために複数の新たな視点を導入する試みであるが、それらの視点が「超越論的なもの」という一貫した問題意識の下で精査されている点において、水準の高い学術的価値を有すると言える。以下では本論文の特徴を、三つの側面から述べる。

第一に、「暴力と形而上学」はデリダがレヴィナスの『全体性と無現』(1961年)に対して行なった批判的考察が中核をなす論考だが、両者の思考をリクール、ブランショ、ヴェイユといった他の哲学者たちの論考との関連の中で比較検討した本論文のアプローチはこれまでに例を見ないものであり、高度な学術性と独自性を見出しうる。「暴力と形而上学」はデリダ研究およびレヴィナス研究において繰り返し言及されてきたが、それらの解釈はあくまでデリダやレヴィ

ナスの哲学の枠内でのみ語られることが多かった。本論文が、「尊重」や「厳命」、「暴力」といったデリダの用語がリクールやブランショ、ヴェイユといった思想家たちの論考と密接に関連していることを提示した点は、特筆に値する。

第二に、本論文が「暴力と形而上学」の先行研究や関連著作に対し、横断的かつ適切な配慮を行なっている点を挙げるができる。本論文が「暴力と形而上学」の先行研究を網羅的に扱っているとは言えないが、これまでのデリダ研究とレヴィナス研究の双方に対して一定の有効性を認めつつ、デリダとレヴィナスの思想の背景をあらためて辿り直そうとする態度は、学術的にも評価しうる。

第三に、本論文がデリダやレヴィナス研究の枠内にとどまらず、広く現代の哲学に通じる問題を提起しようとする姿勢を一貫して保持している点は、評価に値する。

(1) 英米の分析哲学やフッサール現象学に見られる「他我問題」（「他人」は「私」にとつてどのように「認識」されるのか）という問題設定に対して、レヴィナス自身は否定的評価を与えていたが、本論文は敢えてこの論点を設定することによりデリダおよびレヴィナスの立場を明確に整理している点には、一定の評価を与えることができる。そもそも「他者」に関して何を問題にすべきなのかについては議論の余地があり、レヴィナスの問題提起もこの点に関わっていたと言ってもよいが、デリダとレヴィナスという異なる立場に対して本論文は一つの観点を与えたことにより、「他我問題」に新たな展開の可能性を提供することができた。

(2) 「哲学」と「政治」がいかなる関係にあるかについては論者によって様々な立場がありうるが、両者の関係を「他者」という具体的な場面から思考し直した本論文の試みは、「哲学」と「政治」との関わりを「他者」に対する不可避の「応答」という「倫理」的観点から提起している点において、注目に値する。

上記のように、本論文はその着眼点、分析の手法と成果において高い学術的価値を有する論文となっているが、いくつかの点で課題および問題点を残している。

第一に、「超越論的なもの」の分析における「エゴ」（自我）の扱いに関わる問題がある。本論文は「同」や「他」が「超カテゴリー的述語」（あらゆる述語使用の前提となるもの）であることを認める一方で、「エゴ」にもその地位を認めるデリダを批判している。しかし、デリダがその正当性を高く評価するフッサールの超越論的現象学において「エゴ」（超越論的自我）は、すべてがその源泉をそこに汲むものとして世界内の特定の人物とは厳密に区別されており、この意味で「超カテゴリー的述語」に等しい地位を堅持している。加えて、人称という限定された領域においても、一人称の主体である「自我」が他のあらゆる人称規定の前提となっている点に、すなわち「他者」（ないし他人）が「他者」（ないし他人）たりうるのはあくまでそれが〈他の「私」〉であるかぎりだという点に、デリダによるレヴィナス批判の眼目がある。これらの論点に対する批判的検討がなされないかぎり、この問題に関する本論文のデリダ批判は説得力を欠く。

第二に、デリダとレヴィナス双方の思想に目配りをする本論文の配慮も、論点によっては決して十分とは言えない点を挙げるができる。本論文はかつてカントとヘーゲルによって提起

された「無限判断」という論点を導入することで、いずれも「他者」に「無限 (infini)」（限定されないもの）という規定を与えることから出発するデリダとレヴィナスの間の対立を乗り越える道を探ろうとする。その際に本論文が注目するのは、「無限判断」が主語を、述語が帰属するのは別の、より高次の領域に移行させる機能だが、この点に関してデリダとレヴィナスの間に対立はなく、問題はその別の領域があくまで否定を介してしか示唆されないか否かにある。レヴィナスが「無限」なる「他者」をそれ自体何か「積極的なもの」と見るのに対して、デリダはそれをあくまで「有限＝限定 (fini) 」の否定 (in-) としてしか提示できないものとするからである。この点をめぐる議論に曖昧さが残るため、「無限判断」に注目した本論文のせつかくの着眼が十分に生かされなかった恨みなしとしない。

第三に、「顔」として私に到来する「他者」との関係が「平和」裡のものなのか、それともつねにすでに「暴力」的なものなのかをめぐるレヴィナスとデリダの対立が、本論文において最終的には事態を記述するアスペクトの違いとして処理されてしまっている点に関わる問題がある。このような解釈を取ると、議論の文脈によって採用されるアスペクトが異なるだけとなってしまい、単なる両論併記に陥りかねない。そうではなく、「平和」はつねに「暴力」によって侵犯されたものとしてしか姿を現わさない（「一度も現在であったことのない過去」）が、そのようなものとしてつねに「暴力」の傍らに居合わせており、あらためて希求されるに値すると論ずる余地が残されている。こうした議論展開の方向への目配りが十分とは言えない点が、惜しまれる。

最後に、多くの文献を横断的かつ浩瀚に参照する本論文だが、その引用に際して不用意あるいは注意を欠いた箇所が散見された。その結果、それぞれの論者の主旨とは異なる論点を引き出してしまっていることが疑われる箇所も存在していた点は、今後注意する必要があるだろう。

以上のようないくつかの課題を残しているが、早くから重要性が指摘されていながらその難解さのために正面から取り上げられることがほとんどなかった「暴力と形而上学」を、デリダとレヴィナスを等しく俯瞰しうる視点を設定して集中的に論じた本論文の果敢な試みは、そこで提示された論点の豊富さと共に、高く評価できる。また、「他者」や「暴力」、「倫理」に関連する広い視野の下での密度の濃い哲学研究としても高い学術的価値を有しており、審査員一同は本論文が博士（哲学）の学位にふさわしいものであると判断する。